

## シリア、エジプト訪問記 —イスラーム学者の文化的認識

イスラーム研究所所長 森 伸生

平成22年12月21日から29日にかけて、武藤英臣・拓殖大学イスラーム研究所客員教授と池田憲彦・田中逸平研究会幹事とともにシリアとエジプトを訪問した。今回の出張の目的は両国の著名なイスラーム学者と面談することであった。

まず、12月22日にシリアのダマスカスに到着し、日没の礼拝後にワハバ博士の自宅を訪問した。ワハバ博士は当研究所の招聘によって昨年10月に拓殖大学で講演を行っているので、再会を互いに喜び、我々を歓迎してくれた。夕食後、しばし歓談の後に、ワハバ博士に文化、政治、経済など様々な分野に関して質問したところ、一つ一つ丁寧に答えてくれた。現在、ワハバ博士はシリア・イスラーム銀行シャリーア監督委員会委員長を務める傍らダマスカス大学で教鞭をとっており、当日も授業を終えてから、私達を迎えてくれた。その回答については主な内容を後段で伝えることにする。

12月24日、カイロへ移動した。26日午前中にアズハル総長アハマド・タイブ師と面談することができた。タイブ師とは旧知の仲である武藤客員教授がイスラーム研究所の活動を紹介した。同師は、活動の一つであるハラールに関する研究・調査について、ハラール研究調査方法や研究者にアズハル大学卒業生やサウジアラビアのウムルクラー大学卒業生が当たることなどを確認して、そのハラール研究調査の信頼性と正当性を保証すると言って、ハラール研究調査活動を支持した。タイブ師は未だ日本を訪問したことがないということであったので、ぜひ近いうちにイスラーム研究所にて同師のイスラーム講演を実現させたい旨を伝えた所、そのような企画があれば喜んで受けると快諾した。

翌日27日、午前中に、エジプト最高法官アリー・ジュムア師と面談することができた。ジュムア師は昨年3月に拓殖大学に来校し

て、イスラーム講演を行っているので、その時の報告を載せた研究所ニューズレターを手渡した。日本のイスラーム状況などや国際政治の話となり、特に核の問題などが話題となり、こちらから「ニュートリノによる核兵器の無力化についてどのように考えますか」と問うたところ、同師はそのような考えはイスラームにもあると述べ、「力に対して力で対抗するのではなく、つまりプラス極に対してプラス極を当てるのは反発するだけです。プラス極に対してマイナス極を以て当たることによって力を削ぐことになります。」とニュートリノの考え方は道理であると説明した。そして、核の問題について、すでに見解を述べているので、後で読むように、とファトワー（イスラーム法的回答）の一文を私達に渡した。

午後、アズハル大学卒業生世界連盟副議長ムハンマド・アルカウスィー博士を連盟事務局に尋ねた。アルカウスィー博士もやはり、2007年8月にイスラーム研究所にて講演したことがあり、我々の訪問を喜んでくれた。同博士の部屋にはアズハル総長顧問マハムード・アザブ博士やアズハル・アラビア語アカデミー・アラビア語教授ハ

サン・シャーフィイー博士が同席し、日本文化やイスラーム文化の同質性や相違について語ることができた。こちらから、拓殖大学第一期生・田中逸平氏のイスラームと神道の同質性についての考えなどを紹介したが、理解を得るのに難しいところがあった。しかし、逸平氏の自由な発想を受け入れる面もあった。



ワハバ博士（向かって右から2人目）の自宅にて

以下にシリアのイスラーム学者ワハバ博士との対談の一部を掲載する。

森：中世までにイスラーム文明は最高峰に達し、それ以後、衰退の一途をたどりましたが、その原因をどのように考えますか。

ワハバ博士：イスラーム文明の衰退の原因は多々ありますが、そのなかで最も重要なものは、クルアーンとスンナに示されているシャリーアの非遵守、そして成功へと導く指導者の不在、西欧

の植民地化帝国主義による侵略、現代文明の利器に対する意識の欠如、とくに工業化に対する意識の欠如、外国製品の輸入への完全な依存、無知と貧困と病気の蔓延、圧政による影響、イスラーム的な道德倫理の喪失などです。

森：逆に西欧文明は産業革命とともに発展を遂げましたが、その要因をどのように考えますか。

博士：西欧文明の発展の要因は、驚異的な産業革命、硬直化した教会の立場や考え方を退けたこと、アフリカ・アジア大陸を植民地化することで資源を獲得したことなど、さらに実験科学や技術の発展、経済、教育の強化などです。

森：近現代においてイスラーム世界が西欧によって植民地化されたことについてどのように考えますか。

博士：西欧諸国の支配に屈したことは社会の衰退、戦争、経済的大被害、商品独占や有利子銀行の弊害、世俗主義の波及などを引き起こしました。世俗主義は生活から宗教を分離することであり、イスラームを弱体化することであり、西欧はそうにして様々な悪と腐敗をわれらの国へ植え付けました。物質的な考え方を普及させ、精神性を喪失させました。そして西欧はイスラームへの敵意を顕わにしました。

森：植民地から脱却して独立国になった現代において、イスラーム世界はまだ安定しているとは言い難いですが、安定しない原因をどのように考えますか。

博士：イスラーム世界の不安定状態の最も重要な原因は、中東に、アラブ諸国の真ん中にシオニズムの核が埋め込まれたことです。4回、5回の戦争が起りましたが、我々は敗北しました。その原因は西側も東側もシオニズム国家を支持したからです。

他の原因は、経済の後退、独裁的な統治者の存在、シェーラー（政治的協議機構）の不在、またはイスラーム的民主主義の不在、そして現在はイスラームを遠ざける為に西側の民主主義を採用していることです。同様に、一般生活で西欧的生活様式によって多大な悪影響を受けていることです。

森：イスラーム世界が安定するためには何が必要と考えますか。例えば、レバノンやイラクでは宗派対立などによって不安定化しています。

博士：ムスリムたちが安定を実現するために必要なことは、意見を統一し、態度を一つにすることです。そして、崇高な目的に向かうことです。イスラーム的な考え方を基本として、イスラーム的行動によって、貧困・無知・病気の危機から脱却し、建設的で強力な経済を構築し、防衛と抵抗のために強力な軍隊を準備し、国家的重工業を育成し、分派と宗派と分裂と党派を基礎としている西欧的な経済・社会的システムを遠ざけ、公益のために国家的事業を推進させ、忠実なムスリムたちと協力し、本質的な正義を確立するためにすべての方法をもってシオニズムやその他の敵とムスリム一丸となって対峙することです。

森：イスラーム世界が文明の最高峰にあったように、再び諸分野において再興することは可能でしょうか。そのためにイスラーム世界は何をすべきなのでしょう。

博士：イスラーム文明の発展はイスラームの本質に依拠することがまず求められます。そして、我々の共同体の栄光を称揚し、我々に適するものを選択した後に、農業、商業、工業に関する包括的な発展のために、世界の諸国からその方法や知識を学ぶことです。

森：イスラームの歴史の中で、預言者と教友の時代には、「指導者たちは預言者の奇跡を目の当たりにした者たちであり、信仰、教義、行動、人格、教育、道德、崇高な精神性、品性、完全性、中庸性を携えていた人物たちであった。預言者は彼らに模範を示し、彼らにイスラームの真髄を吹き込んだ。」と言われていきます。ゆえに、政治に私心をはさむことなくイスラームの地を統治することができたと言われていきます。今、それが可能なのでしょうか。

博士：預言者と教友時代の政治姿勢に従うことは強い指導者だけが行えることです。そのような指導者たちは崇高な共同体の公益を守ることができ、彼ら自身の欲望に左右されることのない者たちです。支配に世襲制を取り入れることもなく、家系や一集団によって支配を独占することもない者たちです。（森注：現在は不可能であると受け取りました。）

森：西欧文明についてどのように考えますか。

博士：現代の西洋文明は贅沢、安楽、進歩、発展などにおいて、人間社会に多くの恩恵を与えました。同様に交通機関においても発明により多く貢献しています。平和的な目的で生産されるエネルギー、電力、核、そして科学技術を与えました。しかし、この文明は人種差別的な考え方や性格を伴っています。そして弱小民族や発展途上民族の命運を定めています。西欧の指導者たちが植民地政策によって彼らを支配した後に、または彼らを戦争にて攻撃した後にこれらの民衆の財産を強奪しました。現在、西欧指導者はテロ対策として作られたスローガンによって植民地支配へと戻ることを試みています。その目的は、イスラームの人々の生活からイスラームの影響力を遠ざけようとすることです。それから、イスラーム教育プログラムを改変させることです。同様にイスラームの歴史を中傷することです。そして、クルアーンにあるジハードの諸節を消去することです。イスラーム共同体を西欧の計画に従わせるために、そして西欧の権



ワハバ博士との対話





エジプト最高法官アリー・ジュマ師との面談

力の前に屈服させるためです。そして、新たに隷属化を実現するためです。

森：西欧文明に足りないものは何だと考えますか。

博士：物質的な西欧文明が必要としているものは、それは精神性と人間性、道徳倫理性、崇高な原理です。西欧文明は実際にこれらのものを持っていません。ゆえに、西欧文明は破壊と破滅と消滅（を伴う兵器など）で、人々を脅迫します。

森：日本は古来、外来文明の摂取には寛容でした。その寛容さは、古道の順守に由来していたようです。

明治初期においては和魂洋才との意識で西洋文明を取り入れ、徐々に明治後期から、大正、昭和、特に戦後、和魂洋才の和魂が忘れ去られ、洋才だけが強くなってきた、と理解します。日本文明とイスラーム文明の調和をどのように考えますか。

博士：日本文明は開国した時には理性的でした。日本は他の文明の良いところを採用して、悪いところは受け入れなかったと理解しています。これはイスラーム文明の考え方と一致するところでは。

しかし、現在の日本の方向性は西欧文明を例外なく受け入れています。これは日本伝統の明らかな挫折です。日本に望むことは、日本の本質とその独自性を保持することです。そして日本は独自に選択して独立した形で考え実践することを目指すべきです。

私たちムスリムは西欧文明の産物すべてを拒否するものではありません。その中で妥当で正しいものを採用し、有害なものは捨てます。私たちは日本文明の知的中立性を歓迎しています。日本の有益な開発したものを歓迎します。そのまっすぐな人間的姿勢を歓迎します。

森：西欧文明は新たな発明、発見をもたらしましたが、その使用方法を誤っているようですが、どのようにしてくい止めることができるでしょうか。

博士：西欧文明は物質的發展に依拠しています。それには人間に不足、欠陥、破壊をもたらします。そして、人間が精神と肉体を調和させることを妨げます。西欧文明を正常化することは人類の幸福のために義務でもあります。諸国が精神面を無視し破壊

へと導く発明と発見を制限するだけでは十分ではなく、危険なものへの使用を禁止する必要があります。

人類に有害な西欧の発明は、たとえ戦争であろうが環境破壊であろうが、温暖化であろうが、それは明らかに、人類の破滅を促進するものであり、人類に危機や大災難や混乱を起こすものです。

森：イスラーム世界では伝統的な精神文化が継承されていますが、同時に物質的な豊かさを求めていくことができるのでしょうか。

博士：禁欲主義や精神的な唱念や人間的な儀式など伝統的な精神文化を保持するだけでは十分ではありません。精神的な側面と同時に、物質的な富にも注意を向けるべきです。そして、発展と力と物質の繁栄の要因を修得することに注意を向けるべきです。このことは正しいことであり、真理です。

森：近代日本で2番目のマッカ巡礼者・田中逸平は、ムスリムの信仰の深さは古道への帰依にあり、日本の近代での自主独立が実現し得たのも古道への信が生きていたからと見ています。この考え方についてどのように思いますか。

博士：田中逸平の思想は驚くものがあります。彼の考えは自由な発想であり、正しい考えです。彼の思想を広め、護り、実施することが望まれます。なぜなら、彼は日本の利益、日本国民の自立を実現することを求めているからです。彼の思想はイスラームの見解や原理、理念と相通じる思想です。それは理念に相応しいものは採用し、腐敗したものは拒否する選択の姿勢で貫かれています。

私は因習に縛られない、すべてに自由な日本人を称賛します。日本人は考えや行動において、イスラームの方向性と崇高な理念を同じくするでしょう。それは搾取、圧政、傲慢などとは程遠いものです。（以上）

今回の出張で対談したイスラーム学者が語るイスラーム文化はクルアーンと預言者のスンナを基本とした信仰、倫理道徳によって構築された人間の営みの総体であると理解することができた。それはどのイスラーム学者においても表現こそ違えど、本質は同じであり、全く揺るぎない信仰の表現であろうと感じた。



アズハル大学卒業生世界連盟副議長ムハンマド・アルカウシー博士（右から2人目）訪問

## イスラーム世界連盟創立50周年記念会議に参加して—報告 (2)

イスラーム研究所客員教授 徳 増 公 明

勸告書：前号からの続き

### 6) テロリズムへの対抗

会議は、テロリズムと戦い、過激な思想と戦い、テロリズムが広がる原因やテロリズムを如何にして正すかに関する諸会議に積極的に参加しているラービタの努力を称賛する。会議は、ラービタに下記に関する努力を継続することを要求する。

- 1ーテロリズムと戦い安全を確保するための平和実現の方法について、世界のいずれかの国の首都で国際会議を開催する。
- 2ー過激主義者に対抗し、中庸の文化と平安を広め、人民間の共存を目的とした協定を国際諸機関と協力して結ぶ。
- 3ー社会の青年たちを異にかけて虜にしたり、様々な情報手段及び教育による間違った思想を防御する。
- 4ー重要なイスラーム法用語を正し、またムスリムの青年たちを過激主義に陥らせる間違った用語の理解を正す学問的シンポジウムを開催する。

会議は、これらの目的のために努力しているサウジアラビア政府を称賛する。またこのような害悪を取り除くために、サウジアラビア政府が行っている忠告や対話の方法を活用するように、世界のイスラーム諸国に呼びかける。

### 7) 情報と文化

会議は、世界の国々、人々との関係を維持しているラービタの文化事業や情報プログラム事業を評価する。そして、ラービタにこの事業の継続的努力を要求すると同時に次のことを勧める。

- 1ーイスラームの正しい姿を伝えるようにイスラーム諸国や世界諸国の情報機関と協力する。イスラームは愛情、対話、寛容のメッセージである。またイスラームの情報機関に対し、情報はイスラームの

道に沿ったものにするように要求する。

- 2ームスリム間の統一見解の強化をはかり、一部の集団や分派の傲慢な扇動によって引き起こされるムスリム間の分裂や相違の原因を除去するため、各情報機関と協力する。

- 3ーイスラームとムスリムを対象にした偏見のある情報の攻撃を阻止するため、イスラーム諸国の情報・文化省と協力する。

- 4ー国際的視野を持ち、布教を喚起するイスラーム電子情報ネットワークの設立に協力する。それは異なった世代に配慮し、イスラームとその教えに関心を向けさせ、人間社会を悩ませている問題を処理するイスラームからのネットワークである。

- 5ー世界各国言語で放送するテレビ、ラジオ番組に協力する。その内容はイスラーム、イスラームの価値、イスラームの文化的役割に集中し、イスラーム、イスラームの国々、イスラーム諸機関についての中傷や虚偽をも明らかにするものである。

- 6ー世界のイスラーム諸団体とラービタ附属情報機関との活性化および目的を達成するために協力する。

- 7ーイスラームを守るため、イスラームの正しい姿を世界へ伝えるため、最新情報手段を使うことができるジャーナリストを育てるためにイスラーム団体、情報学部、研究・文化センターと協力する。

- 8ームスリム・ジャーナリストの講習会を開催する。そしてムスリムのジャーナリストにイスラーム・カードを発行する。これらをイスラーム諸国の大学、情報・文化省と調整し、協力して行う。

- 9ー第二回イスラーム情報世界会議を開催する。そして、イスラームの情報、連絡網分野におけるモデル実現の準備をする。

- 10ーイスラームと預言者ムハンマドを守るための情報手段にラービタの努力と協力の継続。会議は、「言論の自由と宗教への侮辱についての今日の情報」をテーマにした会議をラービタがイエメンで開催したことを称賛し、その会議で公表された、現在と未来の情報活動手段の重要性についての勧告の実行をラービタに要求する。

- 11ーラービタやその他の機関が発布した情報の憲章を検討し、それから情報や連絡手段の向上を図り、また将来イスラーム世界が必要とするものを守るための新しい情報憲章の発布に役立てる。会議は、アラブの衛星放送で広められたイスラームの倫理に反した番組を中止するために努力したラービタを称賛する。また会議は、ラービタにイスラーム諸国の国民が新聞や放送でこのようなイスラームを軽視し、イスラームの道德倫理に反する報道を行わないように、イスラーム諸国情報省との連携を継続するように呼びかける。

### 8) 経済と発展

会議は、ラービタに対してイスラーム経済分野において、またその全般的な発展において努力を継続することを要求する。ラービタ



イスラーム世界連盟創立50周年記念会議開会式



アジア代表参加者と共に

が世界イスラーム経済機関を設立したことを称賛する。またラービタに次のことを要求する。

- 1ーイスラーム世界の経済分野における力ある要因と弱点の原因を調査・検討する。
- 2ームスリム社会の一部で広がっている失業問題を解決するため、イスラーム諸国政府と一緒に青年団体へ協力することを継続する。
- 3ー多くのムスリム社会に広がっている貧困について、社会的責任を全うするため、またザカート資金を活用するため、団体、慈善団体、イスラーム銀行と協力して調査・検討する。
- 4ー利息取引から遠ざける重要性、イスラームに合致した良い取引、経済・財務問題の対処、国内生産力の減少、資産・頭脳の流失について、一層努力して調査・検討・研究する。

## 9) 障害物と諸問題

会議は、ラービタが直面している障害物について検討し、その克服に努力するように要請する。また会議は、イスラーム諸国、イスラーム団体にラービタが次のことを可能にするよう、ラービタの支援をお願いする。

- 1ーラービタのイスラーム活動における資金源の保障。
- 2ー高貴なラービタの目的を達成するため、ラービタが任命した豊富な専門家の確保。
- 3ー世界中にあるラービタの事務所とセンターが、イスラームとムスリムへの奉仕についてラービタの目的を実現できるよう、またムスリム少数地域や市町村の問題を解決することができるようにラービタの事務所とセンターの活動を支援する。またラービタのプログラム向上のため、ラービタが社会の各団体と行う積極的活動に対するラービタへの物質的、精神的援助のため、専門家派遣のため、ラービタ所属団体との協力のため支援する。
- 4ー一部の少数ムスリム地域での人権が侵されている状態を正すことに協力するため、公式国際人権団体との関係を強化する。またそ

の団体のメンバーになる。

5ーイスラームと、過激な行動を避けるイスラームの特徴を守る方法を導く。

6ー世界マスジド最高評議会のプログラムを活性化する。また大陸や地域の評議会を設立する。現代に合わせたラービタの布教プログラムを作成する。

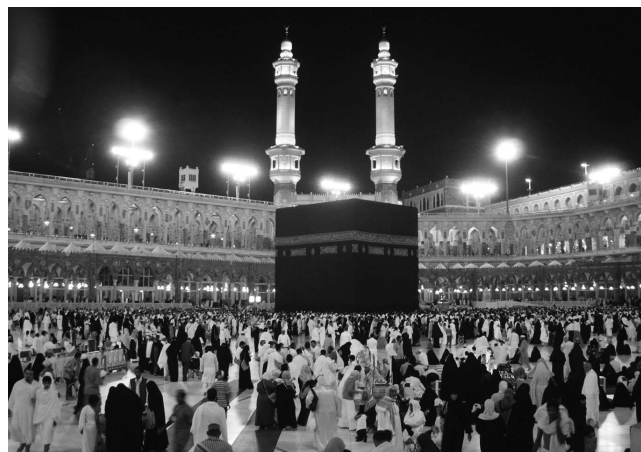
ムスリムが直面する障害物と問題を解決する重要性に鑑み、会議は21世紀におけるイスラーム組織や団体が直面する障害物、問題、挑戦を検討するため、ラービタ主催の第5回イスラーム会議を急がせる。またムスリムの生活におけるマスジドの大きな問題について討議するため、ラービタは5年毎に会議を開催する。

## 10) ラービタと輝かしい未来

会議は、ラービタ事務局やラービタ関連組織や協会がプログラムを実施する場所を設けることをラービタに要求する。会議は、もっと良い活動が期待される進歩した将来のプログラムに意欲を示しているラービタに称賛する。そして次のことをラービタに要求する。

1ーイスラーム共同体が悩む挑戦や問題に対応する計画立案のため、イスラーム世界の諸団体と協力する。その計画は次のことに重点を置く。

- ① 内部的問題：最も重要な問題は、貧困、無知、疫病、不一致の言葉、粗暴な行為、歪曲な思想、異常な行為である。
- ② 外部からの挑戦に対峙。その主なものは、一部のイスラーム国民への敵意、グローバリゼーション関連の挑戦、故国からの追放、通信革命・情報技術の挑戦、イスラーム・イメージの中傷である。
- ③ ラービタが実施する大事業準備のため、ラービタは常設専門委員会を設立し、活用する。
- ④ ラービタやラービタ関係機関のプログラムの資金源を強化するため、ワカフ（寄進）を重視し、拡大する。それによってラービタは世界的地位に相応しい形でプログラムを実行することができる。



マッカ聖マスジド（モスク）中心にあるカアバ聖殿



## イスラーム法学者の見解の相違とその原因

イスラーム研究所主任研究員 柏原良英

### はじめに

現在、イスラーム世界の多数派を占めるスンナ派のシャリーア（イスラーム法）は大きく分けて4つの法学派が認められている。ムスリムは、自分の所属する法学派の判断に従って様々な行動における基準を定めて日常生活を送っている。この4つの学派が成立した背景は、シャリーアの成立過程の要因と密接に関連している。ここではその原因を歴史的にたどりながら探っていききたい。

### 1. シャリーア成立の4段階

シャリーアが整備されていく過程は、大きく分けて次ぎの4つの段階に分けられる。

- (1) 預言者の時代
- (2) サハーバ（教友）の時代（ヒジュラ1世紀末まで）
- (3) 記録とイジュティハードの時代（ヒジュラ暦4世紀半ば）
- (4) 模倣の時代（ヒジュラ暦4世紀半ば以降）

預言者時代は全ての問題は預言者を通したアッラーからの啓示によるか、預言者の承認によって正しい回答を見出すことが出来た。従って、そこに人々の見解の相違は見られない。

しかし、預言者の死後、様々な出来事に対する法的判断が求められた時、残されたサハーバにはアッラーからの啓示であるクルアーンと預言者から聞いた判断や行った行為であるスンナしか残されていなかった。アッラーと預言者の判断を絶対のものと見做し、自分達の判断を極力避けてきたサハーバは、残されたものによって問題の解決を図ることになった。更に、当時は非常に勢いでイスラーム世界が拡張している時代で、預言者の時代には遭遇したことのない出来事にも対処せざるを得ない状況に彼らは、徐々に置かれていった。そこでは、クルアーンやスンナに回答が見出されない時に、それぞれの判断を行い対処せざるを得なくなった。そこからサハーバの間でも見解の相違が見られるようになる。しかし、初期段階でそれはいくつかの問題に対するものでシャリーアそのものではない。たとえば預言者の死後の後継者問題や、初代カリフ（後継者）・アブーバクルのリッダ（背教者）の戦いにおける判断がある。この戦いは預言者の死後、一部の信者が義務のザカート（喜捨）を拒否したことが原因で起きたものだ。ザカートを拒否した者達の根拠は、クルアーン「かれらの財産から施しを受け取らせるのは、あなたが、かれらをそれで清めて罪滅しをさせ、またかれらのために祈るためである。本当にあなたの祈りは、かれらへの安らぎである。」（9章103節）による主張で、預言者からの祈りが得られなくなった以上、それを出す必要はないというものであった。またウマルもシャハーダ（信仰告白）をした者はその財産と生命は守られるというハディース（預言者の言行）を根拠に、彼らを殺すことは出来ないと反対したが、アブーバクルはその同じハディースの最後にある「ただし、その義務を果たすこと」と言う部分を根拠にウマルを説得して、共に戦いに乗り出した。

この時代の特徴は自分が知らないハディースがあっても周りの仲間に聞くことができたことで、後の時代の見解の相違とは異なる。この時代の相違は、ハディースを伝えた本人がそれを忘れたり、そのハディースが伝わっていなかったりしたためなどによる。従って見解の相違が現れるのは、クルアーンにもスンナにも回答が見出せない時に行う個人的な見解から相違が出てくることになる。

サハーバの次の時代はタービウーン（預言者をサハーバから知った第二世代）で、この時代はイスラームが拡大し、サハーバが各地に散らばってそれぞれの場所で自分達の知識に従ってイスラームを伝えた。タービウーンはそれぞれのサハーバからそれを受け継いだ。それぞれの土地に主なサハーバが出て来て、それを弟子のタービウが伝えていく。マッカではイブヌ・アッパースが、マディーナではイブヌ・ウマル、クーファではイブヌ・マスウードが有名である。またそれを引き継いだタービウーンの中から有名な学者が出てきた。タービウは次時代の法学派の基礎になっていく。タービウーンの次にそれぞれの都市に後の4法学派の開祖となる法学者が現れる。クーファにはアブーハニファ、マディーナにはマリークなどが出る。その後に来たのがシャーフイーであり、アフマド・ブン・ハンバルである。またこの時代にハディースの記録が始まり、正しい信憑性のあるハディースとそれ以外のハディースを分けたハディース集が編纂されていき、クルアーンとハディースを法源とするシャリーアの基礎が出来あがって行った。その結果、それぞれの法学派が成立し、人々の間に浸透して行った。

その後、それぞれの法学派は、大学者の業績を伝えることが主になって、自ら法的判断を行う努力をするイジュティハードが見られなくなっていった。

### 2. 見解の相違は善か悪か。

シャリーアにおける法的見解の相違について、それを良いものとする立場と悪いものとする立場の二つが存在する。それぞれの根拠は、以下の通りである。

#### (1) 善と見る根拠：

- ① シャリーアは容易さを求めるものであるから、一つの見解だけで他を認めないことは困難を伴う場合がある。
- ② クルアーンやハディースには人々の見解が異なるものがふくまれている。
- ③ ハディースに「私のウンマ（共同体）に相違があるのは慈悲である」とある。
- ④ 状況や問題が異なればその法規も変わらざるを得ない。
- ⑤ 一人のムジュタヒド（イジュティハードを行う学者）の見解だけが正しいのか、両方が正しいのか分からない場合は、どれかを選ばざるを得ない。

#### (2) 悪と見る根拠：

- ① クルアーンやスンナは相違を悪としている。「明証がかれらにきた後分裂し、また論争する者のようであってはならない。」（3章105節）「あなたがたは何事に就いても異論があれ

ば、アッラーと終末の日を信じるのなら、これをアッラーと使徒に委ねなさい。」(4章105節)

- ② ナースィフ（新たな規則）とマンスーフ（新たな規則によって無効になったもの）がクルアーンに存在すること。もし相違が認められるならナースィフとマンスーフが存在している意味がない。
- ③ 相異の存在は反対の根拠も存在することになり、既にすべきか、してはいけないかが確定しているのにそれがあることになり想像できない。
- ④ 相異の存在はそれぞれの根拠を吟味する門を閉ざしてしまう。

### 3. 法源における相異の原因

#### (1) クルアーン

クルアーンでもタワートル（正しい伝承によるもの）でない読み方（キラアトルシャーザ）でもそれを実行するかどうかで見解が分かれる。ハナフィー派は、それがクルアーンと認められなくても、ハディースとしてではなくクルアーンとして伝えられている以上、その規則はハディースと同等に有効であり実行されるとする。一方、それを実行しない人々は、それはタワートルではないためにクルアーンとして認められない以上、その規則は無効である。また伝承者はそれをクルアーンとして伝えておりハディースとしてではないのでハディースとも認められない。

「だがあなたがたが誓って約束したことに対してはその責任を問う。その贖罪には、あなたがたの家族を養う通常の食事で、10名の貧者を養え、またはこれに衣類を支給し、あるいは奴隷1名を解放しなさい。(これらのことが) 出来ない者は、3日間の齋戒をしなさい。それがあなたがたが誓いをした時の賠償である。」(5章89節) ここで3日間の齋戒の部分で、イブヌ・マスウードは、「連続した3日間」と伝えている。この連続した齋戒を行うべきか、連続したものである必要派ないとするかの相違がクルアーンのキラアトルシャーザによる規則を認めるかどうかによって起こってくる。

#### (2) スンナ

これは、クルアーンに次ぐ法源である。「また使徒があなたがたに与える物はこれを受け、あなたがたに禁じる物は、避けなさい。」(59章7節)

ここでの相違は、まずサハーバのハディースの暗記による相違がある。アブーバクルは祖母の相続についてのハディースを知らなかったが、他のサハーバがそれを知っていてアブーバクルはそれを取り入れた。

次に、ハディースが記録され編纂される時、それぞれのハディースの信ぴょう性について定められた時に、相違が起きる。例えば、タワートルにまで至らない段階のマシュフル（よく知られている）のハディースについては相違が見られる。大勢は、それを取っている。例として、ウマルの伝える有名なハディース「すべての行為はその意図による・・・」がある。これを取らないのはハワーリジュ派一部のムウタズィラ派である。その理由

は、これはアーハード（伝承者が一人のハディース）であるからとする。

アーハード：ハナフィー派では、それはクルアーンに書かれていることの追加となり、そして追加は廃止されたものと見做される。しかし大勢はそれは廃止にはならず、クルアーンに書かれたことに反しなければそれを行う。例えば、クルアーンに「あなたがたの仲間から、2名の証人をたてなさい。2名の男がいなかった場合は、証人としてあなたがたが認めた、1名の男と2名の女をたてる。」(2章282節)とあり、さらにハディース・アーハードで「アッラーの使徒は一人の商人と誓約によって裁いた」がある場合、ハナフィー派はこのハディースについては言及しない。大勢はこれを取る。何故ならクルアーンは二人の男性の証人か一人の男性の証人と女性二人とだけ言っていてそれ以外を否定していないとして、一人の証人でも認めている。

#### (3) イジュマーウ（合意）

サハーバは預言者の言動を実際に見て聞いて伝えた人たちであり、何か問題があれば集まって相談して結論を出した。それはイジュマーウとして受け入れられるものである。しかしサハーバの後のイジュマーウについては、それを根拠と出来るかどうかで相違がある。相違が見られるイジュマーウの種類には、黙認のイジュマーウがある。これは一部のムジュタヒドが語ったことを他の者がそれを知りながら、黙認した場合で、これには3つの意見がある。①それはイジュマーウでも根拠にもならない。②それはイジュマーウにはならないが根拠にはなる。③イジュマーウとなり根拠となる。

またその時代の学者がある問題で意見が異なって、次の時代でそれらの一つの意見に合意した場合それはイジュマーウになるか？という問題では、それを認める者と認めない者がいる。

またマディーナ（預言者の町）の住人が合意し行ったことはイジュマーウになるか？という問題でも、マリーキー派はそれはイジュマーウであり根拠となると見做す。しかし大勢はイジュマーウにはならないとしている。

#### (4) キヤース（類推）

これは、クルアーンにもスンナにもその規則が言及されない問題に対して似たケースをあてはめることである。これはムジュタヒドが新たな規則を定める時のやり方になる。

その相違は、それを認めない者と認める者との相違と認める者の中にも一部の部分での相違がある。

認めない者は、イスラームは預言者の時代に完成していて、預言者はシャリーアを明らかにしているから。それ以上のキヤースは必要ないとする。またキヤースはザンヌ（想像）の上に成り立っているが、想像による規則は認められない。

一方、大勢はキヤースを認める。それはキヤースの根拠はクルアーンやスンナやイジュマーウにある。預言者はキヤースを認めている。サハーバ時代のイジュマーウはキヤースによってなされていることによるとする。

## 正統四代カリフの時代－アブーバクル（8）

（前回からの続き）

ムハンマドに関しては、彼が口を開いて言葉を発するだけで十分であった。

これは、彼が今まで耳にした信頼できる伝承を熟慮したことによって得られた確信に裏打ちされてのことであった。それ以上にアブーバクルの信頼を支えたのは彼が目あたりにしてきたムハンマドの高潔な人生であった。ムハンマドが預言者として選ばれるまで人々と生活してきた40年間、この間にムハンマドは信頼を裏切ったことは一度もない。この間に一言も嘘を付いたことはない。たとえ、冗談であっても。彼の態度は常に威厳に満ちていた。少年の頃も、子供仲間が遊びに誘っても、彼は「私はそのために生まれてきたのではない。」と言って、断っていた。青年時代では彼の名前はマッカの隅々まで知れ渡り、彼の名前を聞く人々に心地よい響きを与えていた。クライシュ族の人々はムハンマドをアミン（正直者）と呼んでいた。それは彼に対する世辞でも戯れでもなく、ムハンマドの人格に対する彼らの心からの敬意の現われであった。

このように正直で信頼され、高潔で、悔悛深く、謙虚で、唯一神を求めて帰依した人物の人生が即座にアッラーに対して嘘をつくような人生に変わることがあろうか。決してありえることではない。

### 第二章「預言者時代のアブーバクル」

#### 「アブーバクルのイスラーム入信」

アブーバクルは逸る気持ちを押さえながらムハンマドの家へ向かった。

アッラーの使徒・ムハンマドは妻ハディージャと一緒に家の中にいた。ハディージャこそが世界のなかで最初にムハンマドを信じイスラーム教徒になった女性である。彼女は従兄のワラカから来たるべく預言者についての伝承を幾度となく聞いていた。それと同時に、結婚前からムハンマドの正直者と呼ばれる人柄をよく知っていた。そして、ムハンマドと結婚したハディージャは彼女の人生において、彼よりも高潔な人物を見たことがなく、心が大きく、知性があり、最も信頼がおける人物を見たことがなかった。

それゆえ、アッラーの使徒・ムハンマドがアッラーから啓示が下ったという話を彼女に伝えたと、すぐに彼女は「あなたは真実を述べられました」と言った。アッラーは、ムハンマドに啓示が下る時期に知識豊かなハディージャを伴侶として選んだのである。

ムハンマドとハディージャのもとには一人の若者がいた。ムハンマドのいとこのアリーである。アリーもまたムハンマドに啓示の下ったことを聞いてすぐに彼を信じてイスラーム教徒となった。

アブーバクルは戸を軽くノックして、ムハンマドを呼んだ。

ムハンマドがハディージャに、「アティークだよ、ハディージャ」と言いながらアブーバクルを急いで出迎えた。ムハンマドの顔は啓示を受けた喜びで輝いていた。アブーバクルが尋ねた。

「クライシュの人々が言っていることは真実ですか。」

「彼らがあなたに何を報せましたか？」

「私達がアッラーに仕えるために、アッラーは私達のもとに貴方を遣わし、我々はアッラーに何も比べ置くことはない、と言うことでした。」

「アティークよ、それであなたは彼らに何と応えたのですか。」  
「彼が述べたのであれば、それは真実である、と言いました。」

すると、預言者の目から涙が溢れだした。喜びと感謝の涙であった。預言者はアブーバクルを抱き締め、額にキスをした。預言者はマッカ郊外にあるヒラーの洞窟で啓示が下った様子を詳しくアブーバクルに話し、最初の啓示を彼に読んで聞かせた。

「読め、創造される御方、あなたの主の御名において。一凝血から、人間を創られた。読め、あなたの主は、最高の尊貴であられ、筆によって書くことを教えられた御方。人間に未知なることを教えられた御方である。」（96章1～6節）

アブーバクルは畏まって深く頭を下げ、目のあたりにしたアッラーの徴に畏敬の念を顕にした。それから、頭を上げ預言者の右手を両手でしっかりと握り締めて言った。

「あなたが誠実で正直であることを私は誓言します。アッラー以外に神はないことを私は誓言します。あなたがアッラーの使徒であることを私は誓言します。」

このようにして、アブーバクルは落ち着いた雰囲気の中にも確信と力強さを秘め、預言者の手を握り締めてイスラーム入信の誓言を行なった。そして、生涯を掛けてイスラームの御旗を掲げ続けていくのである。

アッラーが預言者の無二の理解者として選んだ男が今イスラームに帰依したのである。預言者ではなかったが、いずれ預言者の役割を完成することとなる男が今イスラームに入ったのである。

（次号に続く）

### 研究会報告

#### 【平成22年度第6、7回タフスィール研究会開催】

今年度第6回目のタフスィール（クルアーン解釈）研究会が、平成22年1月22日午後2時より文京キャンパスC館で開かれた。講師は武藤英臣氏でクルアーン第6章129～147節を解説した。また第7回目のタフスィール研究会が2月19日午後2時より文京キャンパスC館で開かれた。講師は柏原良英氏でクルアーン第6章148～165節を解説した。これにより今年度のタフスィール研究会は終了した。

#### محتويات العدد

1. تقرير زيارة سوريا ومصر  
رئيس معهد دراسات الشريعة : نوبوئو موري
2. تقرير عن المشاركة في المؤتمر الخاص بالذكرى الخمسين لتأسيس رابطة العالم الإسلامي.  
أستاذ زائر بمعهد دراسات الشريعة : كيميكي توكوماسو
3. مقال اختلاف آراء الفقهاء  
باحث معهد دراسات الشريعة : يوصيهيدي كاشيهارا
4. مقال : الخلفاء الراشدين (8)  
رئيس معهد دراسات الشريعة : نوبوئو موري
5. أخبار المعهد: الدورة السادسة والسابعة لدراسات التفسير (سورة الأنعام)